

形容(動)詞の意味と意味フレームの係わり方について

黒田 航

杏林大学 医学部

kow.k@ks.kyorin-u.ac.jp

1 形容(動)詞の意味にフレームがどう係わるか

1. すべての語句の意味理解には状況(と呼ばれる概念構造)との対応づけが係わっている。2. 状況は意味フレームという形で特定可能である。これら二つはフレーム意味論[2]の基本的な主張である。

動詞や名詞と同じく、形容(動)詞の理解にも状況が係わっている。それは、特定の形容(動)詞によって特定の状況群のみが喚起されるからである。例えば「まぶしい」は—譬喩拡張を除けば—〈見る〉というフレームの中に生じた感覚の記述であり(e.g., 「西日がまぶしい」, 「?*暗闇がまぶしい」), 「にがい」は—譬喩拡張を除けば—〈食べる〉か〈飲む〉というフレームの中に生じた感覚の記述である: 「その野菜は苦い」, 「そのジュースは苦い」, ?? 「そのニオイは苦い」。

だが、これは形容(動)詞が独自の意味フレームを支配しているということではない。形容(動)詞は意味フレームを喚起する、だが、多くの場合、形容(動)詞によって喚起される意味フレームは、喚起された状況を構成する属性群の一部にプロファイル(profile)を当てているだけである。形容(動)詞と意味フレームの関係は、プロファイルとベース(base)[4]として機能しているに過ぎない。これは基本的に名詞と意味フレームの係わり方と同じである。名詞は状況の名詞化でない限り、意味フレームを喚起するが、支配しない。このことは[6]で詳しく論じたが、要点のみを繰り返す。

重要なのは、フレームの喚起(evocation)とフレームの支配(government)の概念的な区別である。ある語 w によってフレーム f が喚起されるとしても、それは w が f の支配体(governor)であることは意味しない。それが意味しているのは、 w が f の喚起体(evoker)であるということだけである。

この点に関して[7, 8]のような研究は、フレームの喚

起の効果と支配の効果を混同しているように思われる。この混乱はBerkeley FrameNet (BFN)[2]の提供する意味フレーム辞書の記述の中にも認められる。

名詞と同様、形容(動)詞には特定の状況との結びつきが強いもの、つまり状況喚起力の高いもの(e.g., 「すばしっこい」「忌々しい」「かわいらしい」と特定の状況とは結びつかない、一般的で喚起力の弱いもの(e.g., 「よい」「悪い」「難しい」と)がある。従って、このような状況喚起の強弱をうまく表現することも、形容(動)詞の意味記述の際には重要になるだろう。

形容(動)詞が独自に支配するフレームがあるとすれば、それは〈判断〉フレームである。実際、「 y には α (だ)と感じられる」「 y には α (し)く思える」の α に入らない形容(動)詞は存在しないように思われる。それ以外のフレームを形容(動)詞を支配項とするフレームとして設定するのは、理に適っていない。

フレームの支配要素(governor)と喚起要素(evoker)の区別は重要である。支配要素でなくてもフレームの喚起はできる。従って、ある語彙的単位 w がフレーム f を喚起するからと言って、 w が f の名称になると短絡するのは危険である。

だが、(1)のように考えるとうまく辻褄が合う:

- (1) 形容(動)詞が表わしているのは意味役割名ではなく、意味役割の特徴的な値である。

これが正しいなら、その結論として言えるのは、形容(動)詞は原則として(〈判断〉フレーム以外の)フレームを支配することはないということである。

以上の注意の下で、形容(動)詞の意味の意味フレーム基盤の記述を幾つか試みる。

2 形容(動)詞の意味を状況に結びつける

2.1 形容(動)詞の意味の状況基盤の分析の利点

形容(動)詞の意味が何からの属性であるであるというのは定義としては妥当かも知れないが,属性が何であるかが定義されていない限り,あまり有用な定義ではない.属性が何であるかに関して,(認知)言語学にうまい定義は見つからない.例えば,Lakoff [3] は Properties are interactional in nature. と言うし,Langacker [5] も同様の主旨から The meanings of adjectives are characterized in terms of some agent and activity involving the related entity (e.g., *hard/soft, heavy/light, open/closed*). のように言うが,これらに理論的定義以上の実質があるとは思われない.

実際,「難しい」がどんな属性であるかを言うのはそれほど簡単なコトではない.Croft [1] のように,形容(動)詞の表わす意味の幅をプロトタイプ性をもち出して「説明」しても,それが形容(動)詞の意味のポテンシャルの記述に繋がっているかどうかは怪しい.

これに対し,状況を意味フレームの形で特定した意味分析は別の観点を導入する.意味フレーム基盤のアプローチが形容(動)詞の意味記述に有効なのは,(2)が(単にカケ声だけでなく)うまく記述されるからである:

- (2) 属性というのは,必ず特定の状況の中での,特定の要素の属性である

以下ではこの点を幾つかの事例分析を通じて示すことにする.なお,特に出典を示さない限り,例はすべて私の作例である.

2.2 具体的分析

この節では「固い」「重い」「遠い」「嬉しい」「悲しい」を取りあげ,具体的な状況基盤分析を試みる.

2.2.1 「固い」の意味と変型フレームとの関係

(3) では,活動フレーム(4)が喚起され, x を変型する際に抵抗が大きいことを意味されている.

- (3) <<感覚源: x >>が,
<感覚主体: y に(とって)>>,
<GOV: {固い; 硬い}>>
- (4) <<ヒト: y >>が,
<モノ: x >>を,
<目的: z >>のために,
<GOV: 変形させる>>

この際,「固い」は変形させようとするモノ x の属性であると同時に,その際に y が受ける感覚内容を語彙化している.この二つの側面は分離できない.例えば,

- (5) このスジ肉は固くて食べられない.
(6) 彼は {筋肉; 身体} が硬くて,前屈ができない.

(5) では x : {スジ肉} を <噛み切る> のに抵抗が大きいこと,(6) では x : {筋肉; 身体} を <曲げる>, <伸ばす> のに抵抗が大きいことが意味される.

次のような拡張例の場合には変型の内容が典型例からズレている:

- (7) 彼は口が固い.
(8) 彼は頭が固い.

(7) の場合,変型の操作にあたるのは,<<語り手>>が,<手段: 口を開いて>,<内容: 何か>を,<語る>ことである.従って(7)の意味は,次のようなものである:

- (9) a. 彼はなかなか口を開かない.
b. 彼はなかなか重要なことを語らない.

(8) の場合,変型の操作にあたるのは,<<行動者: x >>が,<目的: 状況に合わせ>て,<対象: 自分の考え方>を,<GOV: 変化させ>る)ことである.

2.2.2 「重い」の意味と<持ち上げ>フレームとの関係

(10) では,活動フレーム(11)が喚起される.

- (10) <<感覚源: x >>が,
<感覚主体: y >>に(とって),
<GOV: 重い>>
- (11) <<ヒト: y >>が,
<モノ: x >>を,
<目的: z >>のために,
<GOV: 持ち上げる>>

この際,「重い」は y が持ち上げようとするモノ x の属性を表わす語であると同時に,その活動を行なっている際に y が受ける感覚内容の語彙化でもある.この二つの側面は分離できない.

- (12) このテーブルは重い.
(13) 娘も大きくなって,もう重い.
(14) 家に帰るとき,彼の足取りは重い.

(13) では,< y が, x を, <GOV: 持ち上げる>> のに抵抗があること,つまり「負のアフォードンスがあること」

を意味し, (13) では $\langle y$ が, x を, $\langle \text{GOV: } \{ \text{抱き上げ}; \text{抱き抱え} \} \rangle$ のに抵抗があることを意味し, (14) では $\langle y$ が, x を, $\langle \text{GOV: 進める} \rangle$ のに抵抗があることを意味している. (15) のような拡張例の場合, $\langle \text{持ち上げ} \rangle$ の意味は失われ, 消化に対して負のアフォーダンスがあることのみが意味されている:

(15) このカツ丼は(胃に)重い.

ただし, (15) を (12) に結びつけ, 消化は持ち上げることであるとか消化に悪い食べ物は荷物であるのような概念メタファーを導入するのはバカげているだろう.

このような拡張例の場合には活動の内容がズレていて, 「重い」の意味は (16) という意味に拡張され, 一般化されている.

- (16) \langle
- a. $\langle \text{感受者: } y \rangle$ が,
 - b. $\langle \text{時間:}$
 - i. $\langle \text{行為者: } y \rangle$ が,
 - ii. $\langle \text{行為の対象: } x \rangle$ に,
 - iii. $\langle \text{行為: } V \rangle$ する) 際に,
 - c. $\langle \text{感覚: 重いものをもち上げるときに感じるような負荷} \rangle$ を,
 - d. $\langle \text{GOV: 感じる} \rangle$

消化に悪い食べ物を消化するときの負荷が重いものを持ち上げるときに負荷に見立てられるのは明らかである. これは一種の共感覚に基づく, 負荷の経験の一般化ではないだろうか.

2.2.3 「固い」と「重い」の比較

[7] も指摘するように, 「 x が固い」「 x が重い」はいずれも $\langle y$ が, x に, V をする) 際に感じる抵抗, つまり「負のアフォーダンス」に言及していることでは共通している. だが, 両者の意味するアフォーダンスの内容は同じではない.

「 y には x が固い」には (y による) 形状変化を起こすための外力をはね返すイメージが, 「 y には x が重い」には x が (y の動きかけによる) 位置変化は生じるが, すぐ元に戻ってしまう (持ち上げたものが落ちて, 元の, 下の位置に戻ってしまう) ようなイメージ, いわば (y による) 位置変化を起こすための外力を吸収するイメージがあるように思われる. これらはスキーマではなく, イメージである.

2.2.4 「遠い」の意味と $\langle \text{到達} \rangle$ フレームの関係

(17) では, 活動フレーム (18) が喚起される.

- (17) $\langle \langle \text{感覚源: } x \rangle$ が,
 $\langle \text{感覚主体: } y \text{ に (とって)},$
 $\langle \text{GOV: 遠い} \rangle$
- (18) $\langle \langle \text{移動体: } y \rangle$ が,
 $\langle \text{目標地点: } x \rangle$ に,
 $\langle \text{目的: } z \rangle$ のために,
 $\langle \text{様態: } V \text{ をしながら},$
 $\langle \text{GOV: 到達する} \rangle$

この際, 「遠い」は到着地点までの道のりの属性を表わすものであると同時に, その行程を移動している間に y が受ける感覚内容を語彙化している. この二つの側面は分離できない. 例えば,

- (19) 彼女の住んでいる町は遠い.
 (20) ケンカに負けたその日, 学校からの帰り道はとても遠く感じられた.
 (21) 電話の向こうの彼女の声は遠かった.

「遠い」の意味記述を与えれば, それは (22) のように変項 w を持つものである必要がある:

- (22) $\langle \langle \text{感受者: } z \rangle$ が,
 $\langle \text{時間:}$
 $\langle \text{移動体: } y \rangle$ が,
 $\langle \text{移動の終着点: } x \rangle$ に,
 $\langle \text{行為: 到達} \rangle$ する) 際に,
 $\langle \text{感覚: 移動距離の長さから } y \text{ に生じた疲労 } w \rangle$ を,
 $\langle \text{GOV: 感じる} \rangle$

(20) の例では, 長さは, ケンカに負けたことによる z の体調の一時的悪化によって一時的に生じるもので, 通常は感じられない疲労に結びついている.

(19), (20) の例では, $y = z$ だが, いつもそうだとは限らない. 例えば, (21) の例では, $y \neq z$ で w は声のかすれとして現われる音量の低下, 音質の劣化である.

「遠い」は「固い」「重い」と同様, 活動の達成に対する抵抗力の存在を表わすが, イメージされるのは別のタイプの抵抗である. 「遠い」では, ほかの二つに比べて $\langle \langle \text{移動者: } y \rangle$ が, $\langle \text{目的地: } x \rangle$ に, $\langle \text{移動する} \rangle$ 際に, $\langle y \rangle$ に疲労が伴う, あるいはそれが拡張し $\langle y$ に資源の消耗が伴う) という意味合いが強いように思われる.

2.2.5 語の意味に伴うイメージに関して

語の意味に伴うイメージは、正確に言うと、イメージスキーマ [3] のイメージではなく、質感 (qualia) のようなものであろう。例えば、(21) が言われるの状況では「遠い」としか言いようのない聞こえ (方) があり、それが知覚されている。その聞こえを言い表わすのに、単に「声が小さい」と言うのとも違し、「声が聞きにくい」「声が聞こえにくい」と言うのとも違う。その声には、何とも「遠い」としかしか言いようのない質感が伴っているから、「遠い」と言われるのであろう。この質感は遠距離電話の電力弱体化が原因で生じる音量、音質の消耗に伴うものである。

このような質感をヒトは敏感に、おびただしく区別する。イメージという述語がこのような質感を指すのであれば、イメージという用語の使用に賛成したいが、イメージスキーマという用語で容器性とか経路性のような抽象的な構造が強調されるのは、本来的でない。

2.2.6 「嬉しい」や「悲しい」の意味

「y には x が嬉しい」の意味は (23) に示した〈喜び〉フレームを喚起する。この際、「嬉しい」は喜ばせる物事 x の属性であると同時に、y が受ける感覚内容を語彙化している。この二つの側面は分離できない。

「y には x が悲しい」の意味は (24) に示した〈悲しみ〉フレームを喚起する。この際、「悲しい」は悲しませる物事 x の属性であると同時に、y が受ける感覚内容を語彙化している。この二つの側面は分離できない。

(23) 〈〈感覚者: y〉が、
〈感覚源: x〉{に; で; を}、
〈GOV: 喜ぶ〉〉

(24) 〈〈感覚者: y〉が、
〈感覚源: x〉{に; で; を}、
〈GOV: 悲しむ〉〉

これらを用いて次の例が記述できる:

(25) 彼は息子 (から) の言葉が嬉しかった。

(26) 彼は息子 (から) の言葉が悲しかった。

これらの意味は (27) と (28) として近似できる。

(27) 〈〈感受者: 彼〉が、
〈感受源: 息子 (から) の言葉 (の内容; をかけても
らったこと)〉{に; で; を}、
〈喜んだ〉〉

(28) 〈〈感受者: 彼〉が、

〈感受源: 息子 (から) の言葉 (の内容; *を
かけてもらったこと)〉{に; で; ???を}、
〈悲しんだ〉〉

「嬉しい」「悲しい」が「重い」「固い」「遠い」と異なるのは、後者が感覚者の (内部) 知覚内容の変化に基づくのに対し、前者が感覚者の感情変化に基づく点である。それ以外の点では特に違いはない。

3 終わりに

この論文は意味フレームと形容 (動) 詞の意味の関係を簡単に考察した。結論として、形容 (動) 詞は原則として意味役割名を表わさないと見える。形容詞が表わしているのは意味役割名ではなく、意味役割の値が偶発的に有している特性である。

重要な点は、{容易, 困難, 普通, ...}, {危険, 安全, ...} といった概念は状況の構成要素を特徴づける名称であって状況を定義する概念ではない点である。形容 (動) 詞が表わしているのは意味役割名ではなく、意味役割の値が偶発的に有している特性である。

語によるフレームの喚起とその語が表わす概念によるフレームの支配は概念的に区別されなければならない。さもないと一貫した意味資源の開発は難しい。

参考文献

- [1] W. Croft. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: University of Chicago Press, 1991.
- [2] T. Fontenelle, editor. *FrameNet and Frame Semantics*. Oxford University Press, 2003. A Special Issue of *International Journal of Lexicography*, 16 (3).
- [3] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』(池上嘉彦・河上誓作 訳). 紀伊国屋書店.]
- [4] R. W. Langacker. *Foundations of Cognitive Grammar, Vols. 1 and 2*. Stanford University Press, 1987, 1991.
- [5] R. W. Langacker. Assessing the cognitive linguistic enterprise. In T. Janssen and G. Redeker, eds, *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*, pp. 13–59. Mouton de Gruyter, 1999.
- [6] 黒田 航, 中本 敬子, 野澤 元. 意味フレームに基づく概念分析の理論と実践. 正明山梨, 他 (編), 認知言語学論考第 4 巻, pp. 133–269. ひつじ書房, 2005.
- [7] 仲本 康一郎. 属性の意味論と活動の文脈. ことば工学研究会資料 (SIG-LSE-A403-3 (3/5)), pp. 35–50. 人工知能学会, 2005.
- [8] 仲本 康一郎, 黒田 航, 井佐原 均. 属性認知と言語理解: 生態心理学のアプローチ. 言語処理学会第 11 回大会発表論文集. 言語処理学会, 2005.